

墨川亭雪麿 『傾城三国志』 翻刻（四） -第二編下帙-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18690

墨川亨雪麿 『傾城三國志』 翻刻(四) — 第二編下帙 —

神田正行

凡例

- 一、仮名は一部を除いて、ひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除き省略した。
- 一、文章を読む順序を示した「合印」^{あひしるし}は、その多くを形の近い記号で代用した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、「巻(五丁の単位)」ごとに改段を行った。
- 一、見開きが改まる位置には、「(4ウ・5オ)」の形で丁数を示した。
- 一、各人物が初めて、もしくは久々に登場する場面では、原作『通俗三國志』の相当する人物を【】内に注記した。また一部の地名や事物についても、同様の処置を行なった。「▼」印以下は、稿者による注記である。
- 一、影印ならびに翻刻の底本には、早印本と思われる明治大学図書館(江戸文芸文庫)蔵本を用いた。

《第三冊 表紙》



辛卯新刊

袁紹【▼】駒絵内。中央は初糸

傾城三國志二編 下帙卷上

雪麿著 国貞画 喜鶴堂梓

《第三冊 前表紙見返し》



傾城三國志第二編の三

雪麿作 国貞画 文政辛卯年發行

每編八冊 下帙上卷

吳【▼】蛙】 魏【▼】蛇】 蜀【▼】蝸牛】

呉魏蜀の三國は三虫の三すくみ
 三國志の三すくみは三島町の佐野屋が新板

(五)

しかるに香取は諫めも聞かず、堰が方を返り見て、「我が子ながらも敏貴が、呼びに遣はす使ひの者は、勅使に等しく思ふになん、行かてやむべき道理なし」と、言へば初糸さし出でて、「仰せはさることながら、此度の事は用意すら、すでに整ひそのことは、もはや世上に隠れなく、誰々も知りてぞあらんを、なまじ敏貴の御住まひへ、行きて何をか語らせ給ふ。やくもなまわざにこそ。



(21才 滝夜刃ら、香取を諫める)

とくく心を決し給ひて、事を起こさんこそよけれ。手

延びにならば悪しかりなん」と、言ふに香取は頭をうち

振り、「さばかり心を焦ることかは。事みな我が身が

掌の、内に握るに異ならねば、妨げなし」とて下へ

上より聞入れねば、傍らより滝夜刃姫、「そのこと世に

はや隠れなければ、まづ十婦人のやつばらを、館の内よ

り引き出だし、しかありて後に行き給へ」と、言ふに香

取はうち笑ひて、「まことに御身らが宣ふは、五つか六

つのうなひらが、料簡に等しくて、次へ(21才)／続き

笑ふに堪へたる言葉也。我が身もとより御殿におゐて、

權威を取りたる身にしあれば、誰とて我が身に近づき得

ん」と、言ふを初糸聞あへず、「必ず行かめと思し給は

ゞ、我々も手勢をひきて、御身が後方に従はん。しから

ざれば十婦人、御身に迫りて思ひ設けぬ、禍あらんも量

りがたし。滝夜刃御前も来ませよかし。いかにも御身が

宣ふごとく、不測の禍あるものなれば、いかで妾も従は

ざらんや。さは」とてやがて二人の勇婦は、下へ上よ

り身を厳しく鑑ふたり。初糸は己が妹の、色糸

▼原本



(21ウ・22オ 香取、十婦人に囲まれる)

振り仮名を「はついと」に誤る】といふ者に、多くの女兵を預けつゝ、館と敏貴が住まひとは、程遠からぬ事なれば、その間なる所に伏せ置き、初糸と滝夜刃とは、百騎余りの手勢を従へ、香取の局を守護なしつ、敏貴がもとに至らんとす。折節又も使ひ来たりて、「敏貴主は今朝ほどより、東の御殿に出でまして、御出で今やと待たれたり。とくく御殿へいらせ給へ。奥殿にをはしまし、密やかに一大事の、御物語あらんむね也。たゞ一人いらせ給へ」と、聞いて香取は敏貴の、住まひの方へ向かひてゆきしが、又々御殿の方へ引返し、後方に従ひ来る者共を、**次へ**(21ウ・22オ) **続き**門の外面に残し置き、己一人内に入り、さもしとやかに歩みゆく、行く手も広き長廊下に、十婦人はみな出で迎へ、色代するよと思ひのほか、香取を中にばらくと、四方よりおつとり囲み、中に譲葉声を励まし、「やアく香取聞ねかし。そも磐梨にはいかなる罪の、ありて御身は毒殺せしぞ。その訊聞かめ、いかにぞや。汝はもとより鹿猿を、切り売りする賤しき家より、出でてわなみが勧めによりて、

かばかり富貴を極めたり。その恩は思はずして、かへつて我々を害せんと、謀るはいかなるいはれぞや。恩を恩とし思はぬは、畜生にも劣りたり。また我々をみな濁りたりと、言ひたれどもその澄める者は、何処にかある、聞かまほし。いかに〜と責め問はれ、香取は答ふる

下へ上より言葉もなく、背は汗にしと濡れ、逃げなん道を求むれど、館の口々いつ方も、固く鎖して逃げ場なし。讓葉は声をあげ、「出でよ〜」と呼ばはるに、ものゝ陰より五人七人、あるひは十人十五人の、女武者らが現れ出でて、手に〜刃を振りかざし、走り寄りつゝ香取を中に、おつとり囲んで斬つてかゝり、有無をも言はず瞬く内に、ずだ〜にこそさいなみける。讓葉やがて大勢の、女子どもを勞ひつゝ、また陵【樊陵】といふ女をして、香取が職に代はらしめたり。

かくとも知らず初糸・滝夜刃、館の外面に待ちわびて、「何とてかくは遅きやらん。早く帰らせ給はずや」と、眩き〜いたる折から、誰とも知らず築垣の上より香取が掻き首を、二人が目先へ投げ出だし、「香取の局が

謀反頭はれ、仰せごとをうけ給はり、たゞ今誅し終はりたり。その余の者は悉く、御許しをかうむりぬ」と、呼ばはる声を聞くと等しく、初糸は怒りをなし、「十婦人ら何のゆゑもて、局をば殺したる。いかに人々、彼奴らを逃すな悪党らを、討ち取れよ」と罵る声に、香取が腰元、呉竹【呉匡】と呼べる女、早くも館に火をかけたなり。此ありさまに次へ（22ウ・23オ）／続き色糸は、手の者引連れ館の内へ、乱れ入りて八重無尽、当たるを幸ひ斬つて回る。

さる程に滝夜刃と、色糸の兩人は、剣をうち振り〜つゝ、奥殿深くうち入るに、先に香取が職に代はりし、陵と呼べる者、奥さまより走り出で、「狼籍すな」と罵るを、色糸聞くより飛びかゝり、抜きまうけたる剣をもて、水もたまらず斬り殺せり。

十婦人のその内に、走井【趙忠】・晚稻【程曠】・夏箕【夏輝】・毛衣【郭勝】、とり〜に逃げ回りしが、四人は厳しく追はるゝまゝに、翠花楼と名付けたる、楼のありけるに、身を隠さんとて上るを見て、色糸追つかけ



(22ウ・23オ 十婦人の最期)

やがて又、此楼へも火を放てば、四人の女は怛へかね、
遙かに高き楼の、上より残らず飛び降りるを、待ちま
うけたる色糸は、一人々々に斬り殺せり。

折から炎はいやましに、天にはびこる勢ひなり。讓葉・

段橋【段珪】・節竹【曹節】・金欄【候覧】、「もしや助
かることもや」と、敏貴ともる共に、弁姫・協姫の、
御手を助け誘ひまいらせ、端女少々引き連れて、御殿の
裏手に左りへ／＼右より構へたる、用心門より逃れ出づ。

此折しも盧橘は、先に館の仕へを辞して、世を安らかに
送らめとて、暇を乞ひて出でたりしが、いまだ遠くは
走りもあへず、館に騒動中へ／＼上よりある由を、聞くと
等しく腹巻に、身を固めつゝ長刀ひつ提げ、急ぎて館に
馳せつきしが、段橋は敏貴を、伴ひ連れて走り去るを、
盧橘は声をかけ、右の下へ／＼左の中より「やよ段橋の痴
れ者よ。いまだ自ら死えざるか。敏貴主を伴ひて、いつ
こへ走る」と罵れば、段橋はこれを見て、行く手に伏せ
勢ありと思ひて、引き返し逃げ走る。盧橘は走りつき
度を失ひてたゞずみるる、敏貴を救ひにければ、段橋は

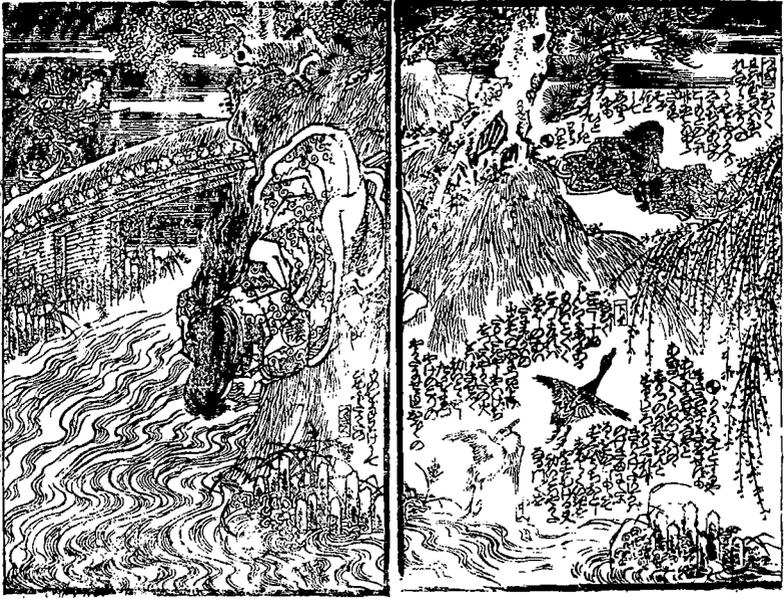


(23ウ・24オ 呉竹、玉苗に迫る)

後をも見ずして、敏貴を捨て置き、己ばかりぞ逃れ去る。

こゝにまた呉竹は、主の香取を殺されて、無念さ牙を食ひしぼり、館の奥庭へ馳せ入りて、あなたをきつと見たりしに、香取が妹玉苗【何苗】が、刃をひさげて出づるを見つけ、「此玉苗は十婦人の、路を受け納め、眼前骨肉の姉香取を、この仕儀によりて殺したる、曲者なれば逃しはやらじ。首うち落として主の仇を、報はんものよ」と罵り罵り、刀うち振り次へ（23ウ・24オ）／続き追ひかくれば、玉苗は追はれながら、後方の方を振り返り、「汝は姉の腰元の、呉竹にてはあらざるや。そが何として主にも等しき、妾を〇／〇かくは討たんとするや。まさなきわざをせずもあれ。あな切なや」と喘ぎく、怨みつ又は罵りつ、逃れ去らんとする後ろより、呉竹斬りかけたりしかば、のけさまに倒るゝを、起こしも立てず首打ち落とし、しばらく息を休めける。

又初糸は館なる、門々を中へ下より厳しく鎖し、十婦人らに縁ある者は、悉く殺しにければ、しばしの間に死骸の山を、その所につき上げたり。滝夜刃は下知を伝



(24ウ・25オ) 讓葉、身を投げる

へ、館の火をば消させつゝ、初糸と敏貴を、まづ焼け残りの館に請じ、多くの者を手分けして、姫二方の次へ(24ウ・25オ)／**続き**御行方を、尋ね求めさせけるが、いまだ在所を知らざりけり。此時に、讓葉・段橋二人の局は、弁姫・協姫の二方を、火の中煙の内ともいはず、用心門より逃れ出で、鳥部野の方へ落ちけるが、日はすでに暮れ果てたり。はじめの程は従ひし、者ども少々ありけるが、悉く逃げ失せつ。夜の二更とも思しき頃、いづくともなく関の声、夥しく響き渡り、乙雪【関貢】といふ女房、手の者引き連れ大勢にて、間近く進み来つ、「やよのう讓葉、いづくへ逃ぐる」と、声かけられて讓葉は、こと急なるに慌て驚き、頭を土にすりつけ、弁姫に向かひて言ふやう、「妾ことはすではや、逃れ果つべき道もなし。御二方は御身を大事に、難を逃れをさせよかし」と、言ひ捨てその身はかたへなる、川の**下へ**／**上より**淵に身を投げて、つひに溺れて失せにけり。段橋はたゞ一人、道を求めて逃れ去る。

御二方は追手の者の、虚実あらはに知れがたければ、



(25ウ) さまよう姉妹

川のほとりの草むらへ、深く御身を隠しつゝ、姉妹共に
 声を飲み、御涙にむせび給ふ。時に葉月の末なれば、夜
 はいたく更けゆきて、四更の頃に至りては、露冷や、か
 に御肌の、衣を潤しことさらに、今朝より物を召されね
 ば、飢ゑも疲れもし給ひて、二人御手をとりかはし、草
 むらの内に伏しまろび、涙にくれてをはしけるが、やゝ
 ありて協姫、「此所にかくてあらんは、只せんもなきこ
 となりかし。異道を尋ね求めて、**六の巻へ**」
 (25ウ)

(一六)

五の巻より命を助かり候はん」とて、弁姫の御袂と、
 御身が召したる衣の袂の、振り袖なるを結びあはし、草
 を分かつてたどくと、歩みも慣れぬ徒歩裸足、ひと足
 ふた足運ばせ給ふに、目指すも知らぬ暗き夜に、荊枸橋
 はびこりて、御足を破り損じて、進まんやうもなかりし
 しば、天を仰いで泣き悲しみ、**中へ** **下より**呆れ果てて
 をはせし折しも、いづくともなく数多の螢、飛び集まり
 て光を放ち、御前に進みければ、協姫は喜び給ひ、「全
 く天の助けなれ。これをするべにたどらん」と、螢に道
 を引かれつゝ、**上へ** **下より**やうくにして歩み出で、
 こゝこそ人の通ひある、山路と思しき所まで、御二方は
 手を取り合ひ、一度歩みて伏しまろび、二度歩みて伏し
 倒れ、五更の頃に至りては、一步も得こそ進まれね、**次**
へ (26オ) **続き**岡のほとりの草むらに、倒れ伏して泣
 き給ふ。

しかる所に塵の世を、厭ふてこゝに年久しく、閑居す
 る女子あり、更けたる夜半の熟睡して、前後も知らずる

たりしが、夢中にはかに薄紅の、玉二つ飛び来たり、庵の後ろへ落ちたりと、見て目を覚ましうち驚き、余り不審の晴れやらねば、一人戸ぼそを押し開き、彼方此方を眺むれば、あな訝しや草深き、内より光を放つがごとく、思はれければ主は怪しみ、草むらのほとり近く、立ち寄りてと見かう見れば、二人倒れて臥したる者あり。主はいよ／＼うち驚き、傍ら近く進み寄り、「おことらは誰が家に、養はれ給ふ幼き人ぞや。包ましからぬことならば、



(26才 崔、夜半に表へ出る)

名乗り給へ」と懇ろに、尋ねれば協姫、「これなるは東の御殿、御霊姫の姫御子にて、十婦人らの乱にあひ、脅かされて辛うじて、これまで来たれども、夜中といひ飢へ疲れて、ひと足も進み得ず」と、聞くよりいたくうち驚き、主は土に這いつくばい、頭を下げて言へるやう、「妾はもと時平の大臣の、館に宮任せし、雄が妹崔【崔烈】也。十婦人らが上／＼下よりほしいまゝに、はたらきては良き人を、妬むを見て世を厭ひ、今此ところに隠れ住み、いとむさげには侍れども、苦しからず思し給はゞ、しばし憩はせ給へかし」と、御手を助けて、草の庵へ入れ奉り、己は御膳を整へて、御二方に勧めまゐらす。二人の姫は御心も、いと安らかに給ひ、しばしまどろみをはしけり。

かゝる所に乙雪は、段橋の逃ぐるを追つかけ、つひにこれを生け捕りつ、「姫御子たちを何方へ、隠し奉りたる」と問ふに、段橋苦しき息をつき、「余りにことの急なれば、道のほとりに捨て奉りぬ。あとは知らず」と答ふるに、乙雪は憎さも憎しと、たちまちに段橋が、首打



(26ウ・27オ 乙雪、崔の庵を訪ねる)

ち落として乗り来たれる、馬の四方手に結びつけて、御
 二方の御行方を、終夜尋ねわび、崔が庵の、ほとりま
 で来にけるが、余りに飢ゑにのぞみければ、とほそに寄
 りて声をかけ、「これは此ほとりを、過ぐる者にて候ふ
 が、いといたふ飢ゑ疲れぬ。次へ(26ウ・27オ) ▼画面左
 上の首級にきだはしがくびとある) / 続き飯あらば一
 碗を、恵み給へ」と乞ひければ、崔はたち出でて、馬の
 四方手に着けたりける、生首を見て訝しみ、「いかなる
 訳ぞ」と尋ねれば、乙雪はしかくと、次第をつばらに
 物語れば、「さてはしかありけるか」と、崔喜びに堪え
 ずして、引いて御前へ出でければ、弁姫も協姫も、そ
 の由を聞こし召し、二人の女の顔うち見給ひ、たゞ御涙
 にくれ給へば、崔も乙雪も、悲嘆の袂を絞りつゝ、崔は
 そが中にも、まづ乙雪に飯を勧め、ありあはせたる酒を
 も飲ましめ、こと大方に果てたれば、乙雪が言へるやう、
 「たとへ今此時なりとて、東の御殿を一日片時も、君な
 くして空けおかんは、いかに我々が力足らず、こと
 疎かにするに似たり。早く館に帰りをはして、人の心を



(27ウ・28オ 弁姫姉妹 初糸らと遭遇する)

安うし給へ」と、勧め申して崔が、嗜み飼ふたる一匹の、瘦せ馬を引き出だし、鞍鍔何くれとなく、整へてそがまゝに、弁姫を乗せ参らし、己が乗りて来たれる馬には、協姫を助け乗し、すでにして庵をたち出で、二十町余りも来つらんと、思しき頃向かひの方より、千束【王允】・揚卷【揚彪】、瓊【淳于瓊】・萌草【趙萌】、鮑【鮑信】などゝいへる女房、初糸ともる共に、数多の手勢を引連れ来たり、弁姫の馬前に額つき、事故なくをはせしやうを、拜していづれも喜びの、涙先立つばかり也。

かくていづれも弁姫に、従ひまつりてゆくところに、向かひに旗差物など、天をも覆ひ隠すがごとく、馬煙ゑんくと、数多の女兵ら野にはびこり、山に満ちて出で来たれば、此方の者ども色を失ひ、茫然として恐れわなく、中に初糸乗りたる馬の、足掻きを早めて進み出で、「やよそれなるは何者なれば、東の御殿のおん帰るさの、道を◇印へ◇印より塞ぎて妨げなす。故こそあらめ、いかにぞや」と、声ふりあげて問ふ所に、先に進みし一人の女、その様太く遅しく、此手の大将と思しき



(28ウ・29オ) 初糸、董根に質す

が、旗の陰より顔さし出だし、「東の御殿弁 姫は、いづこにをはす」と罵るにぞ、御供に従ひたる者、皆胆を冷やしつゝ、言葉を出だす者もなし。生まれ賢き協姫、此ありさまを見給ひて、「それなるは何者ぞ。その名を名乗りて聞かせよ」と、問ひ給へばかの女房、「妾は三好清行が妻、董根にて侍るなり」と、答ふれば協姫、「しからばおことがこゝへ来つるは、東の御殿を守り奉り、御館へ入れんが為か、たゞし道にて奪はんが、為にとてするわざなるか」。董根少し容を正し、「いな異心あるにあらず。御殿を助け奉らんが、ためにこれまで来たるるなり」と、答へ申せば協姫、「おことしか思ふならば、などて御帰るさに、参りあひて次へ」(27ウ・28オ)

／＼**続き**礼をまなさず、とく／＼馬より下らざる。無礼げなるぞ」と聞くと等しく、董根慌て驚きたる、さまにて

左へ右より馬より飛んで下り、土べに頭をすりつけて、かしこまれば協姫、そがそば近く、進み寄り、言葉を厚うなし給ひ、いと懇ろに勞ひ給ふに、董根は心の内に、「此姫才覚をはすこと、おさ／＼世の常ならざりけり」

と、深く驚きもろ共に、弁姫わきまへひめを守護しつゝ、やがて館に入れまつれば、姫上は敏貴に、見へ給ひて互ひの無事を、喜び給ふその中に、御涙おみなみにむせび入り、「よべの騒ぎに凶らずも、◀/▶母君より給はりたる、守り刀を失ひぬ」と、嘆き悲しみ給ひぬれば、おんかたへに侍りたる、女房らがさまざまに、とりなし慰めまゐらして、少し御心おんこころ休まりぬ。

そもく此短刀【伝国玉璽】は、御霊姫世にいませし時、御母は、右の下へ / 左の上より皇后にてをはせしかば、帝より給はりたる、大切の御宝おんたからにて、御霊○ / ○姫に譲り給ひて、それより後は東の御殿おんどのを、譲り受け給へる姫御子おんみこ、必ず此御品おんおんをも、受け納めらるゝを例とせられて、いともかしこき品なりしが、こゝにして失せ給ひぬるは、東の御殿おんどのの衰へと、聞く人盾をひそめける。

さて段橋またはしが、頭かぶをば市に出だして、獄門の木にさらし、世の見せしめとぞなしにける。

すでに董根は御殿おんどのに入て、よろづ己が心に任せ、ほしまゝを働くものから、あらゆる者どもこれを見て、驚

き恐れずといふ者なし。先に香取うながに促されたる、貫之が妻橋立はしだて、友則が娘篠原しのはら、躬恒が女房匡かたみらは、手勢を引てうち出でけるが、香取が討たれたる由を、聞くと等しく橋立・匡は、徒らいたづに手勢を集め、己が宅へ引かへしぬ。

董根は己が為に、邪魔になるべき者なければ、いよゝ志を得て誰憚たれる、ところもなく振る舞ふにぞ、鮎ほしは心安からず、ある日初糸はついとに囁き言ふやう、「董根御殿おんどのの内にあり、必ず野心をさし袂まん」。初糸次はついとへ（28ウ・29オ）／続き答へて、「いかにもさなり。さりながら御殿の内、近ごろ少しく静まりたれば、軽々かろくしくことを起こさんは、憚る所なきにあらず」と、己が言葉受けられねば、鮎ほしは又千束ちつかに会ふて、同じやうに物語るに、千束も従はざりければ、「かくては御殿おんどのの乱れに及ばん。早く身の難を逃れ、胸安からんこそよけれ」と、己が手勢を引具して、秘かに逃れ去りにけり。これよりの後董根が、勢まさくひ益々盛んなれば、はじめ玉苗たまなに従ひたる、者も残らず董根が、手に付かざるはなかりけり。

董根が嫁なりける、杏からも【李儒】といふ者は、才智すぐ



(29ウ・30オ 篠原、董根を詰る)

れし者也ければ、ある日董根杏を、秘かに招きて問ひけるは、「妾今東の御殿、弁姫を取り除けおき、協姫を取り立てて、御殿に据えんと思ふはいかに」。杏答へて言ひけるは、「今東の御殿にとりて、果々しき主なし。此時に乗り△印へ△印より早く謀らば、思ふがまゝになりぬべし。遅きはかへつて悪しからん。明日はや御園に酒宴を開き、諸人を集へて、此ことを言ひ出だし、もし従はざる者あらば、斬り殺し給へ。鹿を指して馬といはしむ、勢ひは今此時ぞや」と、言へば董根うち喜び、その次の日、御園において酒宴を設け、諸人を請じければ、誰かあへて従はざらんや。その威に恐れて悉く、宴席に連なりける。董根は人々の、集ひ終はるをうかゞひて、席の中央に進み出で、杯を勧めもてなしつ、酒たけなはに及べる頃、董根一座の人々に、うち向かひて言ひけるは、「今一つの大事を諮らん、なほざりにな聞給ひそ。そもく東の御殿の勢ひ、をさく禁庭に等しくて、百官百僚ことごとく、備はらずといふことなく、こも又万民の主に等し。いかに女儀なればとて、威儀なき時は

下々を、撫育し給ふこと能はじ。まいて御霊姫の思す旨も、弁姫はその性鈍く、君と仰ぐに足るべからず。次の御子協姫は、才賢くをはすものから、御殿に据えてふさはしからんと、宣ひたることもぞある。妾弁姫を差し置き、協姫の次へ(29ウ・30オ)／続き御座をかへて、御殿に据えんと思ふ也。誰々もこのことは、いかゞ思し給へるにや。銘々のむねを聞かめ」と、言へば諸人驚くのみ、頭を垂れて言葉なし。



(30ウ) 董根、篠原を斬らんとする ※31オと一連

しかる所に一人の少女、おめたる色なく座を進み、威丈も高くおし直り、「用なき言葉を聞くものかな。御身いかななる人なれば、かゝる言葉を吐き給へる。傍らに人はなきと思すや。今の御殿弁姫は、先の御殿御霊姫の、嫡女にてまします上に、つる四箇徳に背き給はず。すゞろに何の故もなく、御座をかえんは烏濟なるわざなり。しかはからんと宣ふ御身が、野心あるをわれよく悟りぬ。誰か従ふ者あらん」と、憚る色なく罵れば、此座に連なる諸人は、手に汗握りてかの少女を、誰ならんと見てあれば、紀友則が娘篠原【丁原】、年の齡は二十にも、足らで十九やたちまちの、月の眉墨眉根搔き、○／○鼻ひ紐解け男には、恋しがらるゝ姿なり。董根は篠原が、面をじろりと◇／◇横目につけ、さも美しき顔ばせは、憎し妬まし炎も燃え、怒る面は火のごとく、「年かさゆきし女子すら、一言をさへ言はぬ先、汝いかななる痴れ者にや。七の巻へ」 (30ウ)

▼篠原の形容のうち、「たちまちの月」は十七日の月。「月の眉墨」以下は、「眉根搔き鼻ひ紐解け待

てりやもいつかも見むと恋ひ来し我を」（『万葉集』
卷十一）を踏まえる。

（30ウ右下、坂本氏広告）

○世間に類なき御顔の葉白粉

美艶仙女香 一包四十八文

同黒油 白髮染め薬 美玄香 一貝四十八文

江戸京橋南へ一丁目東側角 坂本氏製

▼後表紙封面の奥目録（「辛卯孟春新彫蔵版目録」）は、
第一冊と同じ。本誌第五二〇号一七〇頁参照。

《第四冊 表紙》



辛卯新刊
 孫堅 ▼ 駒絵内。中央は堅田】
 傾城三國志二編 下帙巻下
 雪麿著 国貞画 喜鶴堂梓

《第四冊 前表紙見返し》



雪麿著
 末摘花の名馬に牽るゝ心は貪欲
 無慙をゑばに甘雨日和は峯の風
 雪麿著 国貞画
 けいせい三國志第貳巻の四
 ▼ 「風」、「凧」の誤か
 篠原におく露命は消て墓なく
 貫とめぬ玉川の調布が烈き太刀風

(七)

六の巻よりみだりに舌を動かせしぞ。いとすゞる也、無礼なり」と傍らに隠し持ちたる、刃を抜きて斬らんとす。かゝる折しも篠原が、後ろに控へし一人の女、丈高く肥え太り、眼涼しく眉秀で、名を調布【呂布】と呼ばれつゝ、弓射馬乗るわざに賢く、並ぶ方なき勇婦にて、近き頃より篠原と、交はり深く姉妹の、義を結びつゝ、調布は、年一つ劣りなれば、妹と呼ばれてゐたりしが、この時ひ



(31才) 調布、篠原を守護する ※30ウと一連

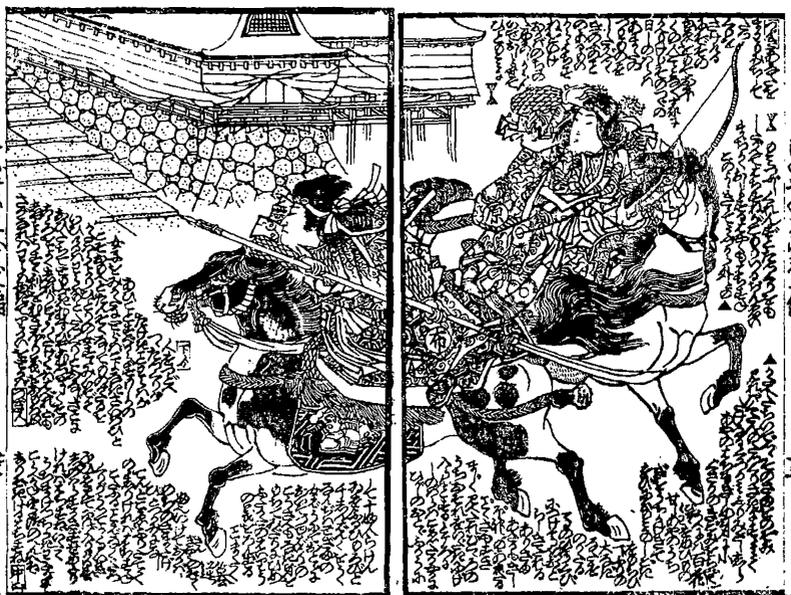
と振りの長刀ひさげ、怒れる眼を見開きて、あたりを睨んで立つたりけり。杏はこれを恐れ、急ぎ董根を押し止め、「館の大事を諮らんこと、酒のむしろはよろしからず。明日広座敷に出で給ひて、**上**印へ**上**印よりおほやけに論じ給へ」と、言ふに数多の女房らも、篠原をなだめつすかしつ、勧めて家に帰らしむ。

後に董根**下**へ**中**より座に連なりし、女房らにうち向かひ、「妾が言葉を御身らは、いかゞ思ひ給ひたる、聞かし給へ」と言ひけるに、盧橘は座を進み、「御身の理論いたく違へり。往ぬる元慶のころ、かしこくも帝陽成天皇、不道にてをはせしかば、延喜九年に薨去ありたる、時平の大臣の**次**へ(31才)／＼**続**き御父君基経公、帝位をすべらし奉られ、光孝天皇、いまだ時康親王にてをはせしを、御位に即けられたり。陽成不道にてをはすをさへ、廢しまるらせ光孝を、御位に即けられしかば、万民最負の沙汰に及べり。基経いさゝか私なく、かつそのことに与るべき、職に当たり給ふすら、人口防ぎがたきのみ。まいて弁姫、いとけなくをはせども、御性いと賢くて、



(31ウ・32オ 董根、盧橋を斬らんとする)

露ほども過ちあらず。御身もと御殿において、いさゝかの職もなければ、館の事に与るべからず、又基経の才もなし。何をもて事を謀らん。天子廃立の議論をもて、御殿のことに比べんは、烏滞なるわざに似たれども、たゞ大小の違ひのみ。御身強ひてこのことを、謀らんとし給ふ時は、わなみをはじめ諸人も、御身をもて此館を、奪ふの企てありとせん。とくく妻が言葉について、そのことはやめ給へ」と、言はせも果てず董根は、怒りの面色血をすゝぎ、あまりに急いでものを言はず、剣を抜いて斬らんとす。傍らより村雨【蔡邕】に、裏白【彭伯】といふ女房、おし止めて言ひけるは、「盧橋は聞こえたる、女博士にてあれば、人これを知らざる者なし。御身もし殺し給はゞ、諸人必ず震ひ恐れん。止まり給へ」となだむるにぞ、董根怒りの胸撫で下ろし、剣を鞘に収めつゝ、盧橋が官位を、剥いで館を追ひ払ふにぞ、盧橋は是非もなく、こゝよりすぐ世を逃れ、北岩倉に閑居せり。千束はこの様見るよりも、「長居せんは悪しかりなん」と、思へば席を進み出で、「御殿の大事をかや



(32ウ・33オ 篠原・調布、董根を攻める)

うの時、あげつろふは益なき下／＼上よりわざなり。別にその日を約し給ひて、凶らんこそ肝要ならめ」と、言へば諸人その意に任して、一度に館を退けば、もとより短慮の董根が、「その義ならば一人も残らず、斬つて捨てん」と剣をうち振り、館へ出入りの門きはまで、たち出であたりを見まはすところに、かの調布といふ女、勇める駒にうち跨がり、長刀小脇に引そばめ、門のあたりを行き来するさま、いかにも凄まじかりければ、董根はそのけしきを見て、杏に「あの女は、いかなる者ぞ」と尋ぬれば、杏そばより言ひけるは、「あの女こそ篠原と、兄弟の約をなしたる、調布と呼ぶ者にて、もと武蔵国玉川の、生まれの者に候ふよし。女に稀なる勇氣の者にて、天が下に並ぶ者なし」。董根はその言葉を聞、恐るゝこと甚だしく、園の次へ(31ウ・32オ)／＼続き彼方を回り道して、調布を避けけるにぞ、そのゆゑをもて多くの人、事なく家に帰りけり。

その次の日篠原は、数多の兵を従へつゝ、「昨日のことのあるものから、董根を生けおかば、後のために悪し

からん。いで押し寄せてひと飲み、▼／▲揉みつぶしてくれんず」と、調布をも従へて、董根が籠りいる、陣営間近く押し寄する。早くも董根このよしを聞て、自らの外、▲／▲方へたち出でつゝ、その様を望み見れば、件の調布先に進みて、丈なる黒髪振り乱し、白綾の鉢巻き締め、身に小鎖の着込みを着し、上には百花を縫ひ物せし、綾の袿をうちかけ着て、帯には紅絹のしごきを用ひ、一振りの大長刀を、乗りたる馬の平首につけ、馬を躍らし来たれるありさま、あたかも鬼子母神の荒れたるごとく、さも凄まじく見へたれば、心の内恐れを抱き、逃げ入らんとするところに、篠原は声高やかに、「東の御殿不幸にして、十婦人ら権威を振るひ、諸人千辛万苦を受く。汝は外様の女房にて、御殿において露ばかりの、功さへもなき身をもちて、みだりに姫二方の、廢立の義を論ずること、またく窺逆の賊婦也。生けておかば後の妨げ、ひと掴みになしてん」と、声振り立てて罵りければ、董根答ふる言葉なく、調布が撃つてかゝる、勢ひを見て逃げ入りけるを、篠原すかさず攻めたりければ、董

根いたくうち負けつ、近きわたりに泳へかね、宇治の辺へぞ退きける。

董根中へ下より人を集へつゝ、「調布が猛きこと、妾が相手とすべからず。もしかの女子を味方に取らば、こよなき幸ひとこそ思へ」と、嘆息なして物語るを、傍らより一人の女、進み出でて言ひけるは、「妾もと調布と、同じ郷に生ひ立ちて、友垣結びて睦ましく、その心をよく知れり。心猛くは侍れども、思慮薄く利を貪り、義を思はぬ性なれば、妾行きて利害を説かば、次へ(32ウ・33オ)／続き必ず味方に参るべし」と、こともなげに請け合ふは、夙【李肅】といふ女也。董根はうち喜び、「汝さほどに請け合ふならば、よしなことを計らふべし」と、言へば夙答へて言ふやう、「しからば御身の秘蔵し給ふ、末摘花【赤兎馬】と名付けたる、濃き紅の栗毛馬と、黄金三包を与へ給へ。彼が心を釣りつけて、味方となさんは難きに下へ上よりあらず」と、言へば董根心決せず、秘かに杏によしを問へば、杏はあざ笑ひ、「御身東の御殿をば、我が物にせんと思すほどにて、何



(33ウ・34オ) 凧、調布を訪ねる

ぞや一匹の馬を惜しまん」。董根「げにも」と納得し、やがて馬飼ひに言ひつけて、かの馬を引出ださせ、ならびに黄金三包と、別に彼が喜ぶべき、今様の小袖、一襲と、帯一条を添えて次へ(33ウ・34オ)／続き渡せば、凧これを受け取りつゝ、供人二人引連れて、一人に件の馬を牽かせつゝ、小夜を幸ひ調布が、宿所へ秘かにおとなへば、門番の小者たち出でて、「何処よりぞ」と尋ぬるに、凧は会釈して、「妾調布御寮とは、古くまじらひ奉りて、いまだ友垣の義に背かず、折々とむらひ参らする、凧と呼ぶ者なれば、とくく此よし伝へてよ」と、言へば門番その旨を、調布に伝ふれば、調布はまづ呼び入れて、凧に対面するに、凧札を厚うして、「姉御別れて久しけれども、恙なくをはせしか」。調布不審の眉根を寄せ、「しか宣はするおことは誰にて、又何の故をもて、妾をかかは訪ひ給ふ」と、問ふに凧うち笑みて、「御身と妾はもと同じ、武蔵国、玉川の郷に生まれて、童の頃より深くまじらひたる、凧と呼はるゝ友也。絶へて久しき対面に、面忘れし給ひしか」と、問へば調布横



(34ウ・35オ) 凧、調布に末摘花を示す

手を打ち、「いかにもしか侍りしものを、見忘れたりしをぞまじさよ。して御身は今、何処いづこにをはす」と、問へば凧答へて言ふやう、「妾は東の御殿おとこに仕へて、上童の職を受け、怠らずつとめ侍りぬ。御身御殿の御為おんを、思すことの厚きよしを、聞くに嬉しき堪たへがたく、こなたに一匹の名馬あり、まことに千里の駿足とは、かの馬のことなるべく、水を渡り山を越ゆるは、並々の馬をして、平地ひらちをやるよりなほ易やすし。その名を末摘花と呼べるは、これ紅くれないの栗毛にして、いと美しく侍ればなり。これを御身に参らして、いよ、勢ひを助けん為ために、わざ／＼これまで来たれり」とて、件の馬を牽かするに、調布馬様をつらく見るに、全身は火よりも赤く、頭より尾に至りて、長さ全ひらて一杖也。蹄ひづめより鬣たてがみまで、高さ七寸しちすんに余りたり。嘶いなく声空に響き、海にも入るのかたちあり。調布喜おもび面おもてにあらはれ、「かゝる名馬をゆくりなく、贈らるゝ厚恩おんには、何をもて応ふべき。〆／＆するよしあらず」と吐息つく。凧は胸かきあはせ、「御身が言葉極めてよからず。今宵妾がとぶらひしは、義のために来たれるな



（35ウ・36オ） 凧、調布に利害を説く

れば、いかでかその報ひを望まん」。調布喜び自ら立ち
て、酒肴をあんばいし、いと懇ろにもてなしければ、酒
たけなはに及べる頃、凧調布に杯を、勧めながら言へる
やう、「互ひの心疎かならねど、住みどころを変へてよ
り、久しく絶へて訪れも、せざりしが今会ひ会ふて、喜
びこれにますことなし。さりながら御身の姉御も、この
馬はよく知りてをせば、もし見給はゞ欲心兆して、必
ず奪ひ給ふべし」と、言へば調布うち笑ひ、「御身はや
酒にまはされ、わけなきことを宣ふにや」。凧面正しう
して、次へ（34ウ・35オ）／続き「妾さのみ酔ひ侍らず」。
調布は手をこまぬきて、「御身も知り給ふがごとく、妾
に一人の姉ありしかど、世を早うしてすでに久し。何と
てこれなる馬を見ん」と、あざみ笑へば凧も、腹を抱え
てうち笑ひ、「妾が姉御といひたるは、篠原ぬしの事を
いへり」。調布答へて言ひけるは、「妾久しく篠原が、所
にありて日を送り、今さら出づべきやうもなし」と、言
へば凧又言ふやう、「御身は天下をも自在にすべき、才
女にてをはずから、人あまねくこれを知れり。名を高う

し富貴の身と、なり給はんこと袋を探りて、下へ / 上よ

り物を取るよりと易し。何をもて、篠原ぬしの下風ふうに立ちて、その家をだに出づること、能はずとは宣ふぞ。

いつまで人の下しもにゐて、あたら月日をうかくと、空しく過ごし給はんや」。調布鼻をうごめかし、「かう言へば烏濤うごがましく、聞き苦しくは侍らんが、妾十二分の才ありながら、その能を延べんと思へど、恨むらくはしかるべき、君なきをいかにせん」。凧こ、ぞと座をすり寄り、

「諺ことわざにいふにあらずや、良禽れうきんは八の巻へ (35ウ)

▼凧の後方に置かれた屏風には、「匹夫无罪、懷宝

是罪 文政十四卯春王 湖岳斎録」とある。

(八)

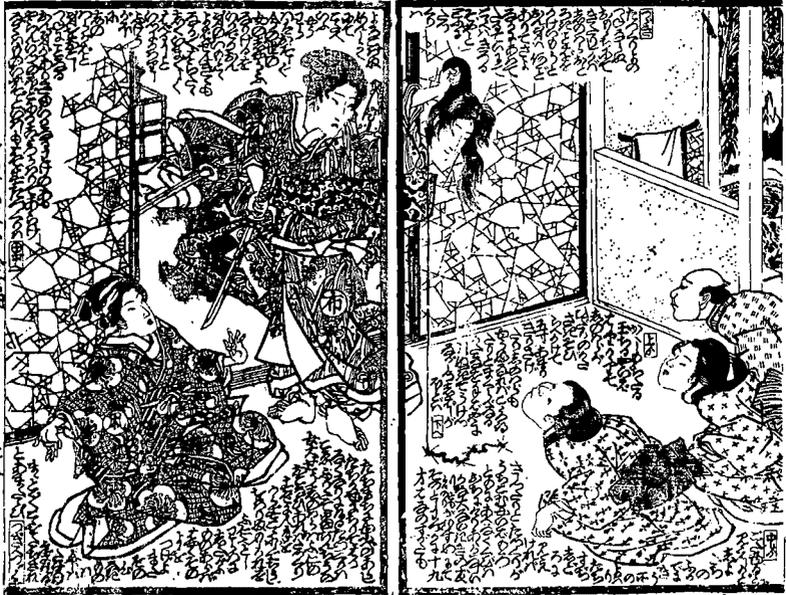
七の巻より木を選んで住み、賢臣けんしんは、主を選んで助くと聞けり。日月は移りやすくして、空しく年老ひ果つる時は、後悔ほご臍を噛むとも及ばじ。御身もし今の世にて、英雄の婦を選みて、これにつかんと申し給はゞ、あまねく見回したる所、董根はらすねとじ刀自に及ぶもの、又世にあらじと思ふかし。董根は賢き人を、敬ふこといと厚く、又よく人にへりくだり、寛仁くわんにんにして徳厚く、賞罰せうばつきはめて明らかれば、つひに大なるわざを起たこさん」。調布思たうくりひ惑へる色にて、「妾もとより董根に、仕へんことを願へども、たゞ恨むらくはかの人に、ちなみなきを次へ (36オ)

／続きいかゞせん」と、思ひ屈くしてをるのみ也。凧こは聞あへず、もたらし来たれる三包みの、黄金こがねおよび一襲ひとの、小袖と帯を取り出だせば、調布はうち驚き、「こはそもいかなる訳なるや」と、言へば凧 下へ / 上より 小声にて、「しばらくあたりの人を遠ざけ、言ふことあり」と囁ささけば、調布はそが言葉に任せ、席にありあふ者どもを、しばらく次へ立たせける。凧あたりに人なければ、



(36ウ・37オ 調布、篠原に迫る)

「董根主御身が徳を、慕ひおはずこと久しくて、今日しも妾を使ひにて、此品々を贈らし給ふ。先に御身に見せまゐらせし、馬もこれ董根の、たまもの也」と聞くよりも、調布しばく嗟嘆しつ、「董根の刀自何をもて、妾を愛し給ふこと、かくのごとく深きやらん。その恩徳に報はんこと、何をもてするとも及ばじ。いかゞはせん」と頭を掻けば、凧はなほにじり寄り、「わなみをだにも用ひ給ひて、今かゝる身と成り上がりぬ。おこともしかの人に、仕へ給はゞ富貴となり、栄華は心のまゝなるべし。その手立てはいと易く、掌を返すに等し。御身何とて思案に及ばん。とくく思ひを巡らし給へ」と、勧めらるれば調布は、しばらく思案の頭を傾け、やゝありて言ひけるは、「御身しばらく待ちてたべ、妾奥の間に踏ん込みて、篠原が頭を取りゆきて、董根に奉らん」と、言ふに凧傍らより、いよゝ心を励まして、「恐らくは御身たやすく、篠原を討ちえ給はんや」。此言葉にいよゝ激して、調布は、刃をひさげ奥の間へ、飛ぶがごとくに駆け入りける。凧は「しすましたり」と、奥の様子



(37ウ・38オ 調布、篠原を討つ)

を聞かむる。

此折しも篠原は、臥所ふしどに入て枕に就き、何心なく灯火ともしを、かゝげて古き物語の、草紙どもを取り散らし、これかれと読みぬたりしに、誰たれやらん慌たゞしく、傍ら近く来る者あり、と見れば次へ(36ウ・37オ)／＼続き調布世の常ならぬ、面持ちおもにて来たりしかば、篠原驚き言葉をかけ、「妹御身は何ごとありて、小夜中こよなかに慌てたる、体にてこゝへは来つるぞや」と、問ふに調布は喜ばぬ、面色にて答へ言ふやう、「妾は恐らく今の世の、女の丈夫なりけるを、いかでか御身の妹いもと呼ばせん。聞くもなか／＼腹立たしく、忌々しく侍るかし」と、いつに変わりはし不興ふけい顔に、篠原がばと身を起こし、「常に異なる御身がありさま、いかなる訳のあるやらん、いつの程にか心変わりはて、あらけなくはもの言ふぞ」と、言はしも果てず調布は、○中へ／＼上より隠し持ちたる玉散る刃やいば 走りかゝりて篠原が、左の肩先背せむひへかけて、五寸あまり斬り下げたり。篠原も勇婦なれば、「心得たり」と枕辺なる、刀を手早に引抜きて、受けつ流しつしばしが程は、下へ

／＼申よりこた心ゆると見えしかど、初太刀しんたぢの深手に急所の弱り、太刀筋しどろに見えければ、「さしつたり」と調布が、打ち込む刃やいばもろ共に、あへなく首は落ちにけり。嗚呼あ、悲しいかな大内記、紀友則このともりのりが娘にて、その年わづかに十九才、花の姿もたちまちに、夕べの嵐太刀風たちかぜに、散りてはかなくなりけり。

調布は声振り立て、「当陣中の女大将、篠原は不仁の行ひあれば、調布すでに人手を借らず、こゝにて誅しをはりぬ。もし彼を不仁也とし、妾に従ふ者あらば、早くその由を告げよ。またその心なき者は、命は助け得ざるまゝ、こゝを立ち去れ」と数多あまたたび度次へついで続く（37ウ・38オ）／＼続き呼ばはるにぞ、その由聞きてありあふ所の、僕小者は半ばより、多く落ち失せたりしとぞ。

凧は最前より、様子いかにと待ちゐるたるに、調布が声として、「篠原を討ち取りし」と、言ふと等しく奥に入り、まづ調布を褒めそやして、「とく董根に此由を、聞かせん」とて伴ひ連れ、篠原が首をもたらし、己が陣所へたち帰り、董根にかくと告げければ、董根が喜びな、

めならず、みづから迎へて調布を、奥深く座せしめつ、己は席をへりくだり、改めて初対面の、口誼かうぎを述べたるその後ごちに、おもねりへつらふ声音にて、「今偏ひとへに御身を得たるは、まことや日照りに雨を得て、苗の青々せいせいするに似たり」と、言はれて調布笑ましげに、「妾今暗きを捨てて、もて明らかなるに仕ふ。願ふは母と尊みて、力を尽くし侍りなん」と、礼を返せば董根は、限りなく喜びつ、酒肴さかなの用意をなし、調布を厚くもてなし、此度は黄金がねひと包みと、小具足一領ちを贈り物とし、しきりにその心をとりに、後のためとぞ思ひける。又凧にも恩賞を、重く与へて骨折りを、深く労ひけるとなん。

董根はゆくりなく、調布の我が手につきしを、大方たならず喜びつ、かゝる勢ひあるをもて、威を振るふことますく強く、自ら御殿にのぼりゐて、重き▲印へ／＼▲印より局の職に経上がり、おのれが妹いもに秋空あきぞら【董受】と、いふ者のありしかば、これをも重くとり用ゆ。杏しきりに董根に、「弁わきまへ姫を押し籠めて、協かなふ姫を御殿おとこに据えよ」と、勤むること度々なれば、董根もとよりその心あ



(38ウ・39オ 調布、董根に従う)

り、ある時大きに酒宴を開き、数多の官女らを集へつゝ、坐中を見回し言ひけるは、「それ大なるものは天地也、それに次いで君と臣也。これ世を治むる本にあらずや。上礼を失ふときは、下背かずといふことなし。妾つらく思ひはかるに、かく尊むに座りてをはする、弁姫その性暗く、上とし尊むに足るべからず。妾今、基経公の例に従ひ、弁姫の、御座をすべらしその代えに、協姫を据えんと欲す。おこころはいかにか思す、言ふことあらば言へ聞かん」と、あたりを睨んで傍らなる、刃を少し抜きかけて、旨に違はゞひと撃ちと、言はぬばかりの意気込みなれば、数多の官女ら勢ひの、猛きに恐れ誰ありて、返答する者なかりしところに、初糸【袁紹】はつと座を進み、「過ぎつる頃陽成天皇、明らかならざる行ひを、なし給ふゆゑをもて、基経公その御位をすべらし参らせたる例はすでに、眼先に巖然たり。されども今弁姫、欠けたる所をはし次へ(38ウ・39オ) 調布の背後の屏風に「花有百日紅 人无十日好 湖岳斎題」とある)／まさねば、これぞと罪しまぬらすなし。



(39ウ・40オ) 初糸、董根を語る

おこと今姉姫を捨てて、妹姫を据えんとするは、必ず御殿に背かんとする、底意ありてのことなるべし」と、憚る色なく答ふれば、董根腹に据えかねて、「此御殿を起こさんとも、寝かさんともそは我にあり。誰ありて、我が旨に背かん。なれ我が刃を鈍しとして、かくは狭みすると覚えたり。斬るゝ斬れぬのあんばい見よ」と、威丈高に罵れば、初糸も肘を張り、刀の柄に手を添えて、「和御寮が剣よく斬れば、又我が剣もわざもの也。鈍しはしこし試せし後に、言ふこそよけれ」とへた負けせねば、董根いよ、腹立ち怒り、互ひに刀の鯉口くつるげ、隙間を狙ひて詰め寄する、すはや大事と見えたる所に、傍らより村雨【蔡邕】は、慌てうろたへ董根が、腕にすがり押し止め、「事いまだいづれ共、定まりたることなきに、軽々しく御殿におゐて、剣戟を振らんこと、よきにあらず」と理をせめて、なだめつつかきしつするかたへに、初糸「かくては我が意ならず」と、刀を鞘にうち収め、あたりの官女らに挨拶なし、しづやかに外面へたち出で、おのが供人呼び近付け、宿所をさして帰りける。

もと此初糸姉妹は、時平公の御弟、仲平公に、二方の息女ありて、そが一人は都近き所に、武士の浪人ありけるが、故ありて此浪人の、妻となりてをばせしが、この腹に儲けられたる、兄弟にてぞありける。又一人は、紀長谷雄の妻となり給ひて、此御殿に仕へつゝ、名をば槐【袁槐】と呼びなして、姫の傳きなりければ、いと輕からぬ職とし尊み、勢ひ頗るありければ、その故をもて

◇印へ◇印より初糸兄弟、館に召されて使はれしとぞ。



(40ウ 外面・此面・彼面の三命婦)

かくて董根は身内なる、塵うち払ひ坐に着きて、傍らに初糸が、叔母の槐ありけるに、うち向かひて言ひけるは、「御身が姪の初糸は、いたく無礼の女子也。さりながら御身に対して、つひに彼を斬らざりけるよ。又二柱の姫御子たちを、据へ据えざるの論はいかに。御身が心明かしね」と、言へば槐は勢ひに、氣圧されて一議に及ばず、「まことに御身の言ふごとし」と、言へば董根又かたへの、官女らにうち向かひ、「御身らが心はいかに。もし我が言葉に背くとならば、武士に命じて皆殺しぞ」と、眼を怒らし睨むれば、官女らはおのゝき恐れ、「誰かは仰せに背かん」と、皆一同に返答す。

董根は又官女らが、数多の中をうち眺め、外面【周慙】・此面【伍瓊】・彼面【何顯】とて、三人の命婦ありけるを、そば近く招き寄せ、次へ(39ウ・40オ)／続き「初糸心よからぬ体に、おのが宿所へ逃げ帰れり。われその様子をつらく見るに、謀反を企むの心ならんか。いかゞあらめ」と問ひければ、中に外面が答へて言ふやう、「今二柱の姫御子たちを、据え据えざるの論においては、

世の常の人の論ずべき、理論にあらず待るかし。初糸は
 そが本末を、よくも考へ知ることなく、只怖ぢ恐れて逃
 げ帰るのみ。何ぞ野心を起こし得ん。さるを野心ありと
 して、急に迫ることあらば、已むことを得ず心を変せん。
 その上彼奴は東の御殿に、叔母の縁の侍るから、そのひ
 きによりて此館に、宮仕へ申す者、幾人といふ数を知ら
 ず。もし野心を抱く時は、彼ら皆悉く、従ひつかんは
 治定也。たゞ此事は捨て置きて、その心を安から▲▲
 しめば、自づから事成らん」と、言ふに等しく村雨も、
 「先に妾が止め申すも、此ゆゑを思へば也。もと初糸は
 様々に、謀を好むといへども、決断なき生まれ也。ま
 づうち置かし給ひなば、諸人も安堵せん」と、言へば董
 根聞入れて、そのまゝにして差し置きける。
 へめでたし〜〜〜。

香蝶楼国貞画

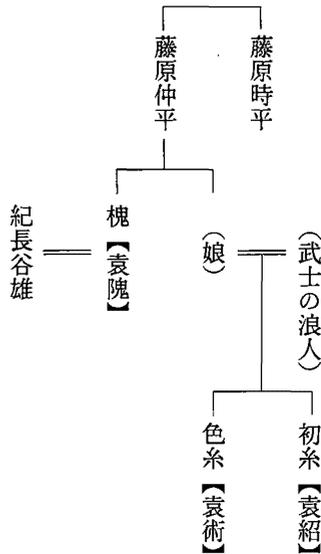
墨川亭雪麿作

(40ウ)

▼後表紙封面の奥目録（「文政十四辛卯春喜鶴堂新刊」）

は、第二冊と同じ。本誌第五二〇号一八六頁参照。

《初糸系図》



(かんだ・まさゆき 法学部准教授)

※【】内は原作の相当する人物